

ミオヤの光

降魔の巻

靈的生活

生命の有る宗教意識即ち靈の活氣ある信仰を生活するを靈的生活と爲す。世には宗教を唯言語文字の教權を以て眞の宗教と謂ふあり。そは眞實の生命ある信仰に入るべき方便とは成るべけれどもそれを以て知識を以て即ち了解を以て生命ある宗教と云ふものではない。活ける信仰即ち靈的生活の心理狀態を説明せんと思ふに、靈的生活もまた肉の生活と其形式に於て相比例すべき點あり。肉の生活には必ず二の職分がある。一は榮養即ち自己を保存するに就て缺ぐことのならぬ食物である。二には生殖で自己の種族を存續するには必要なる男女夫婦間の交渉である。此の二の職分は凡ての生物に至りて共通して生活に伴ふものである。肉の生活の内、榮養を攝取するは動物にも植物にも各自己の養ふに適當せる養分を取つて之を食し之を消化して自己の生理機能を保存し、人の生命を保存するのである。

靈の生活にも之に比すべく或る靈的養分を以て心靈を養ふのである。此靈的元素は

本より法界に周徧せる靈力にて之を本願力ともまた衆生攝取の一大靈力とも又靈的光明とも名づけ彌陀身心徧法界映現衆生心想中と云ふ。此靈力の存在することは宗教的實地に實驗に於て明かである。

榮養と生殖とに比例すべき靈的三職分

靈の榮養を法悦と曰ひまた法喜とも云ふ。靈の生殖に比すべき作用を三昧と云ふ。是に附ける妙味を禪悅又三昧樂と云ふ。靈的生活には法喜の食と神人交感の三昧樂とは缺くべからざる職分である。若しまだ此の二職の全からざる宗教意識は唯宗教の知識の分に止まりて未だ眞實靈的生命ある宗教意識にあらざるを云ふのである。

禪三昧爲食また禪悅爲食と云ふなれども食に比するものまた生殖に例するも何れも比例するまでである。然れども此二職分が靈的生命を保存し傳播するの原動力となることは事實である。

靈の糧となる法悦は愛樂佛法味とす。此養素は法界周徧の靈力また靈光にて人の信仰心を以て之を味ふべきのである。此靈的要素の存在は眞實靈的生命のある心靈の常に味ふ處、靈の糧とも云ふべき要素も肉體の榮養と同じく胎兒も母胎にありて養分を受けて長養せらる。生後赤子は自ら消化すべき榮養機能が未だ發達せざる間は母が消化せられたる小兒の消化に耐ふる乳汁として小兒に哺ましむ。小兒は之に由りて養はるる間は其糧となる乳の味に於て、生理衝動の自然に乳を慾求するものにて未だ其味の如何は意識することはなからう。身體の成長するに隨つて生理機能も心理作用も成熟し、其食の味の甘苦も判然と自から意識することが出來得る如くに、靈の糧に於てもまた然りである。初心の信仰心には佛法味即ち法悦の味ひは未だ味ふことはない。初め母の消化せる乳に養はるるやうに師友知識の自己の味ふ處の妙味を分つて之に養はるるは小兒の乳に於けると同じく靈性稍々發達して信心開發し靈的生活に至つて初めて靈的甘露の妙味を實感することが出來る。心靈を養ふべき法喜とは靈的氣分にて心氣快然として皓廓胎滯として熾怡極りなく心廣く體肝かに、食物でも眼に其色を見鼻に其香を嗅ぎ舌に味ふ如くに、靈の養分も靈的感覺に靈我至美の妙感は感じらるる。

靈性益々發達するに隨て法悅の妙味もまた彌々深重なるに至らん。靈の養分は天地に充滿すれどもそれを攝取すべき享受すべき靈的機能が成熟せざるほどは自ら直接に其れを味ふことは出來ぬ。靈を養ふ甘露即ち聖人の糧なるアミリタは無量永恒の生命を養ふの糧である。

糧の目的

食物の目的は即ち榮養身體組織の全部が消耗するを以て之を補充して活力生命を保存するのである。而すると夫は甘味と曰ふ快美感を附隨して其食欲を起さして自ら好んで食物を取ることになる。若し甘く感ずべき作用がなかつたならば食物を取ることが厭々忘る。然る時は遂に榮養不足して活力保存の目的を失ふに至る。そこで一切生物界の大親なる法身は自然生理の欲求として生命保存の目的の如何に關せず唯味を貪ぼる爲にも食事を怠らぬことになる。世には活力目的を顧みず耽酒嗜味遂に衛生を害することを知らざる者さへあるに至る。それ等は手段と目的とを顛倒したる結果と云ふべきである。

靈的生活の榮養なる靈の糧に於てもまた然りである常に信念を以て靈を養ふに如來の心光また恩寵また一大靈力を要するのである。衆生の信念に之を享受し感應する榮養機能である。

人の信念の中に如來の靈光常に加はり感應して之を感じて靈は活力となるのである如來の靈力もとより無限なるも衆生の信念の程度低ければ靈感の度も隨て淺し。信念彌進む時は靈感の力また深し。喩へば火は大小なけれども燃料の大小に隨て火勢同じからざる如し。

靈的養分の如來の靈力は之に依て靈的生活をなさしむ。其目的は靈的生命として生活活動するにある。如來の靈に由て養はるる心體の活動の如來の使命を果すべき行爲となる。如來恩寵を感じ靈的生活をするに個人としても團體としても階級あり。個人としては信仰幼稚の間はまだ個人靈的生活の資格なし。他の師友知識の教諭に由りて信仰の生命相續するは恰も小兒が母の養ひに由る如し。信念進むに隨て一的個體の生

五

活となるは即ち信心開發し、靈的生命となる是精神更生して後の生活なり。已に個體の生活を作るに至つては現に彌陀の子としまた彌陀の一子として靈的行爲をなすに至り、已にここに至りて生活の目的は彌々明瞭に靈の糧に由て養はれたる靈の生活は願作佛心と願度衆生心との心とし、自己の靈は益々進みて上は佛位に向つて上り、下は衆生に向つて他人を自己の心靈と同じきに誘導す。此自己の向上を願作佛心とし他人を勸めて靈の生活に誘引するを度生心と云ふ。一切自己向上の萬善萬行は皆如來の靈力に養はるるに由て行ふことを得るなり。又自己に得たる靈を他人に頒つのみならず自己が彌陀の聖旨を以て自己の意志とし如來の一切衆生を攝取し至善の靈界に向はしめたまふを目的とするを又自己の目的とす。生活々動が靈的生命の目的にてそれには靈の糧なくてはならぬ。如來の恩寵信念に加はり來る即ち靈を養ふ糧である。

法悅の妙味

已に靈を養ふは生命保存の目的靈的生活の爲なれども感情に恩寵の加はる處に不可思議の妙味の感ずるあり。得も云はれぬ歡喜悅樂を感ず。そは天地に充ち溢るる計りなる大愛の感愛は徐ろに流れて長閑なる春の日の爛熳たる櫻花咲き匂ふ園生に遊戯するにも優れて熙怡快樂のほど是ぞ法悅の靈境なり。

從來の人間界の感情を蕩除し滌洒して一度如來大悲の靈界即ち涅槃常樂の都に神を轉入する時は天も開け地も開け清々しく乾坤は顯はれにけらし。其靈界に逍遙する心象は質にえも云ふ可からず。

榮養の目的と副

肉體の榮養は蛋白質脂肪纖維の養成分を要すると比すべき、心靈の感覺と感情と知力と意志とに對する清淨と歡喜と智慧と不斷とは是心靈を養ふ要素である。聖典を讀誦し諷誦し若くは清晨に頭腦も清々しき時に朗らかに神を聖經の文に誘引せられて清き樂園に逍遙し七重寶樹の林には八風に天樂を奏し八功德池の波は徐に動きて微瀾をたて天空に響き庭に曼陀の華を雨す等の言に我を忘れて思を淨土に遊ぶなど自ら靈

七

を養ふの糧となる。或は如來の靈徳を讚美するの聲は樂に和して光明を稱へ念を讚稱に導かれて蒼天を凌ぐの尊容を想ひ我想念に浮ぶの相好に如來の慈悲の圓滿なるを表せり。是亦信念を養ふの料ならざるはない。或は念佛三昧の窓には阿彌陀佛と心を西にうつせみ(空蟬)の如く脱出でて生佛一如の妙境に入る。又は冥想觀念の床には神を日想に凝らし或は佛の相好を觀じまたは如來の大慈悲を想ふ等。また常に大悲の懷に安住するの憶等は皆靈を養ふの糧と善導大師は定め給へり。斯様に種々の靈を養ふ糧はあれども行住坐臥に常に如來と離れざるは名體不離の稱名最も親し。口稱の三昧はまたいよいよ熟するに隨つて益々其妙味の極りなきを感ず。故に佛法の美味を味ふの妙處に至らざれば未だ佛法の妙を語るに足らじ。吾同胞衆よ。吾は自ら此妙味の極りなきを覺えて之を味はずには居られぬ。又自ら味ふ如く吾同胞衆に之を頒ち申さずには居られやうか。

(終り)

行蘊魔

行蘊とは行爲の心理にて即ち意志のことをいふ。意志は人の精神全體の行爲に名づけたるものにして、智力にも感情にも意志は離れぬものである。精神に善に悪また道徳不道徳などの意向のいかゞによりて人格の高下を定むるものである。

人の意向として意志の向きかた性質が種々に區別が出来て諺にいふ十人十種、各其好む處其性格が同じからざることは面のさまゝなると同轍である。而して意志の地盤が最終の根底たる偉大なる基礎の上に立てるものなれば決して魔のために侵さるゝものではないけれども、無宗教の人の意志は我を基礎としての我意である。また世俗情操としていかにも意志の原動と成るべき人の情操が卑賤である野俗である。肉我より衝動する意思にてあれば自然其理想と云ひ希望と云ひ卑劣なること免れず。我また我意が世俗の卑劣なる情操よりいづる意志に世界動機として浮世の義理などのために動かされて世の爲に搖さやすし。かゝる弱所に乘じて行魔が人の意志に托してついに惡魔の

ために誘惑せられ捕虜にいたるの止むを得ざるにいたりて、人の意志の方向を誤らしめ人格を墮落しつひには三惡道に落つるにいたる。

凭る人に對して意魔の障を降伏して其心靈を復活して、凡夫を轉じて聖者たらしむるものは如來の降魔成道の増上力なり。人已が我意の薄弱なるを捨て如來の無上の力あるを信じ之に一任し、我意を聖旨に歸服する時は意志の最根底たる心靈開展し如來の神聖正義なる聖旨の司導の下に行動し意志をして益々至善に向上せしめて靈化し給ふ。人の意志なるものはいかにして薄弱なるかまたいかにして世魔のために便を得られて人生を過らしむるであらうとなれば、肉我の意志なるものはつまり、肉慾我慾の肉の幸福を主義とし我意は唯肉の幸福を最上の目的としあれば其理想とする處其希望する處要するに肉我の満足を求むるに過ぎず。意志を肉の奴隸とし畢生肉の犠牲となるを自ら甘んず。凭る情操と云ひ意向といひ人生の墮落を司とる惡魔のために誘惑せらるゝいかに容易なる性能なるぞ。

高等なる宗教心即ち如來の聖旨は人の意志を靈化し益々向上し無上菩提を得せしめ人の意志を聖者たらしむるにあり。

聖者となることは肉我の幸福を求めんとするには甚だ不利益なるなれば殊に靈我即ち聖にして勝を得むか肉我はつねに靈我に服従し毫も自分勝手欲望に満足をゆるさざるなり。

意志に對して如來は眞理の神聖なる光明を以つて人の意志を靈化し正しき聖き道のなかによき道を歩ましめ限りなき生命をして無上の幸福を與ふ。

肉我の欲の意志は其根底微弱なるが故に、縁の方に動き易く故に八風の爲に搖かさる。凭る肉の弱き意志の虚に乗じて魔は侵入して意志を變じ性格を轉じて人格を墮落せしむ。

人の好意なる同情同愛

人の意志を高尚にする理想又遠大なる希望によりて人格を高等にする自利利他の菩提心を破壊して人格墮落せしむるものは魔なり。肉は惡魔の誘惑に感じ易し。

世に八風てふ魔氣あり弱き意志を搖して輕毛の如くに左右す。八風とは何ぞや。利

衰譏譽誇苦樂之を八風と名づく利とは肉我意の欲望に満足を與ふる力にて肉に幸福を與ふる器金錢及びすべての財人を滋養する處の財物を得ることにして利のためには義を忘れ佗を顧みず、爲に道徳より墮落するものなり。

利てふ風が人の貪欲の火を煽動するときは欲火熾にして竟にとまる處なからしめんとす。利の爲に思の動かざるを望と云ふ。之が爲に動かざるを凡夫と名づく。凡そ世に利欲なるものほど人の心を染汚ならしむるものはあらじ。貪欲に染まざるものは汚中の蓮の如くに潔し。佛陀の身好相光明端正なるは利の爲に汚されず利の爲に動かざる麗しき相を示されたり。

利風は人の身心を緊縛し身心を使役す。即ち經に心の爲に走使せられて安き時あることなしと。

利に心の動かざるを剛者と云ふ。論語に孔子が我未だ剛者を見ずと。時に門人が曰く申振は剛者なるべしと。孔子云く振は慾ありなんぞ剛をえんと。いかに勇者も利の爲に動かざるべしものほまことの勇に非ず意志微弱なるものなり。

孔子易と讀んで損益の卦に至つて喟然として嘆す。子貢問ふ夫子何の爲に嘆すと。

孔子答ふ夫自ら損するものは益す、自から益するものは缺く。吾是を以て嘆すと。此卦を見れば自ら貪欲を慎み功なくして祿を得、徳薄くして位貴き、また僥倖の財利、分に過たる名譽、ここには必ず禍の伏する處、此稱譽はこれ毀謗の兆候なり。

行蘊として衝動し來る伏せるサタンは己が分限を忘れて利欲名譽の衝動として己が分限を忘れ節度を越え謙遜を失はしめ眞面目を缺き己れ一躍して顯要の倚子に登り登龍門の譽をえんとして 眞面目なる勉力を墮らしむ。

有爲なる青年宿昔青雲の志を蹉跎たらしむ古往今來行魔の爲に意志を侵され天職の資性を唐らに肉欲の奴隷となし、高なる人格たるべかりしものをして空しく名利の奴となりて聖き道を誤らしめしものいづくぞや數べからざらん。

一たび自己の意志の微弱にして無力なる八魔のために障られて自から菩提の成すべからざるを自覺し、一に意を歸て如來に歸命する時、靈性的の生活となり常に如來の司導の下に行動し光に靈化せらる時は弱き者に偉大なる力を與へ忍び難きを能く忍び

堪えがたきに堪え易からしむ。光に靈化せられたる靈我が自己を支配する時に魔もいかなとすること能はず。

四念處に心は無常なりと觀ぜよと實に吾人が肉我の心意は決して常然として不動なるものにあらず、まことに頼り難き者にぞ。朝に勤王の忠臣は夕には朝敵の名を買ふに至り、昨日は孝女として稱せられし女にも今日は仇し浮名の立つ身と變る。肉我はまことに頼み難し。

サタンはいかに剛かりし意志のところにも靈の光のなき處にはサタンの力の侵入を妨げず。一切の人々を擧げて悉く聖賢たるを得ざるは意志を侵すべきサタンの力に依てなり。

サタンの怪しき毒が人の心意に薰染せんか、蘊蘊靡靡より衝動する心意の活動は念々サタンは胸臆に彷徨し曩に青雲の志は忽に轉じて肉慾の奴隷となり賢人君子もサタンの爲についに小人凡夫に墮落す。

サタンに感じたる意志の活動は燃るが如くに人の意に衝動す。

心光の増上縁によりて人の行蘊之に感ぜんか忽ちに轉じて心意の衝動は靈なる聖龍の火を黙じたる我が意志の燈となりぬ。

聖光の點じたる意思を靈聖とは呼ぬ。聖火に燃つゝある心念を靈的衝動と名づく。之心光によりて靈は復活し聖子となりてよりは日夜八億四千念々は自らつねに聖き火をして燃へつゝ、この光によりて吾人が靈はつねに燃ゆ。

識 蘊 魔

識蘊とは心理の智力なり。本智力なるものは聖龍を被むるにもまた聖き道に進みゆくべきにも正智は最も必要なるものなり。智力其ものは決して靈を殺すサタンにはあらず。然れども肉我は智力を利用して己慾を逞うせんとする其虛に乗じてサタンは智力に加はりて智力を惡用して正道を妨げ靈の生活を害せんとす。

ソクラテスが言ふ如く知は徳なり、人全く真知缺くるが故に不徳を行ふと。また彼は、我は自己の無知を識ると。全く己が無知を自覺する人は氏の如く、また孔子が知

らざるを知らずとせよ是知るなりと。斯る眞如の光ある處は惡魔もいかんともするこ
と能はざるべし。

しかれども古の人は己が爲にす。今の人は人の爲にすと、學問に於ても知識に於ても
全く己を明にし、自己の我を自覺せんと知識にはあらずして佗の爲にする知識教
育なり。世の中の人は皆己を見るの明なく己を識るの智なきか故に世は悉く盲者なり
と云やうな人には、惡魔は其虛に乗じて其心内に托して其人を狂ならしむ。然らざれば
憐憫たらしむ。

知識が惡魔の爲に侵さるゝ時は傲慢偏屈自尊にして圓滿に人格を發展すること能はず。
唯己のみ獨り尊大なりとして世を輕侮し衆人を見ること土芥の如し。佛在世に一の
外道學者あり、己が智を恃み知識誇り白晝に燈を把りて歩行す。人其故を問へば則ち
云ふ我時に燈を把るは佗にあらず、世は悉く闇黒なり我獨り能く智慧の光を以て世
を照すと。時に佛陀は彼が愚なるを救はる爲に或商店の店員と化して彼が自己の無智
を自覺せんが爲に天文地理等すべての及び内明につきての秘要を請問せしに之に答ふ
ること能はず、意に自己の無知を覺りて擧高の角を折つて佛陀に歸してつひに羅漢果
を得たりと。

ソクラテースは常に學生が己が知識を持って擧高して節を失ひ身の分を過り有爲の青
年をして空しく識魔の爲に過まりて生を誤るものを救ふこと急なりき。

ハウルセンの倫理に人は高等の教育を受けても天性其性質適せざる教育と、其位地境
遇の爲に運用できぬ知識は全く價値なしと。己が能力己上の知識は人をして益患なら
しむ。唯知識のみを重んじ天賦の能力性質に適應せざる知識の結果不消化知識を以て
判断を擾亂し抑壓す。

ハックスレーが人の痴愚は生ながらのものにあらずして十中八九は父母教師が其自
然の知的欲望を抑壓し管に無味乾燥なるのみにあらず、不消化なる糊口に關する人間
的欲望を絶えず生せしめんとするに由ると。斯る識魔には人の天性を攝すると共に生
じ來る傲慢等によりて過度の教育は獨り知性を鈍くするばかりでなくまた感情を鈍く
す。

人の教育と境遇との間に衝突起り職業及び地位が從來受け來れる教育を利用せしめ
ざる時は知識は彼を幸福にせざるなり。彼は自から不相應の要求を起して己が職業を
快とせず、己が外圍に對して心地安からざるものとす。不當の教育ありて農事に従事
するものの如き之が適例なり。徒らに世人には憚かられ輕せられ爲に己世間に對して
心平ならず、自己の地位をもて己に適せざるものとす。斯の如き今日其幾何あるを知
らず、男子と云はず女子と云はず教育あるが爲に己が屬する階級より放逐せらるゝも
の世間至る處に有るなり。彼等は己が自活の要求は其品位を墮すものとして爲に不快
を感ず。

教育の進むに隨ひて受けたる教育に個人及び社會的關係に適合せずして人をして不
幸に陥らしむるもの毫しも怪むに足らず。教育ある婦人、家庭に風波を起したりしが
近來大學を出たる者往々其受たる教育の爲に糊口に苦しむ。是高等なる知識を得るこ
とを學びて衣食を得る方法を學ぶに忽せにせるにより彼等は斯損害を償はんとして力
と欲望とを有するも其教育は之を實現するを許さず。何を以て之を許容せざるか。曰
く衣食の爲に手足を勞するは教育あるものゝ名譽を失墜する慮あるとすればなり。

知識の爲に識魔のために襲はれ來て知識は諸方面に於て向上の妨害をなし靈格た
らざらしむ。

若し如來の心光に人の知力を照す時は從來識を痲痺せしめた魔の中より覺醒し、す
べての知識は眞理を覺り得る時は人の智は神の前に愚なるをさるとる。

肉の生活上に於て尙斯の如きの知識魔は人を誤らしむ増して況や心靈の上に於てを
や。故に人如來心光によりて全く己が無知を自覺し唯一に如來に歸し、克己自勉自策
して惡徳の源なる傲慢の關をさり、一に如來の心光によりて覺醒する時は無明の眠さ
めて人生の眞理をさとり、益聖道に向上すべし、實れども虚しきが如く苟しくも智者
の振舞をせず、實に己は是無知無力なり、但如來の心光によらずしていかでか聖道に
進むことを得ん。

肉我は無知無力なるを自覺したる我に識魔もいかんともすること能はず、故に聖法
然は愚痴に還りて念佛すべきをすゝめ、たとへ一代の法をよくく學すとも一文不知

の愚鈍の身になして厄入道の無知の輩に同うして智者の振舞をせずしてただ一向に念佛すべきことを教ゆ。

心光加はる處に眞知生ず。眞知は智者の振舞をなす如き似而非智にあらず。大賢は愚なるが如し。賢哉回哉と、回は終日言はず愚なるが如し。外面に智識を弄ぶものは人の前の智は如來の前に愚なり。心光の中に益々進んで正智をえよ。

ト翁がイワンの話にイワンの愚には惡魔もいかんともすること能はず。從弟の二人は私の智と勇とをたのみにして己を偉大のものと誇大擧高するが故に魔はその便を得て彼等を見ごとに墜落せしめたり。譚よく誠魔の相を畫けるではないか。

毀譽八風の難に碇泊と増上縁

人の意志なるものは甚だ薄弱なり。一時の勇氣はいかばかり猛くはやるも永久に意志の一定して持續する事は甚だ難し。孔子は白刃も履むべく爵祿をも辭すべきも中庸をば能くすべからずと云はれし如く、志は實に枯みがたしとするも君子の君子たるは全く一時の感情的勇氣にあらずして永久に常たる意志の靈たる處に於てす。すべての人をして自ら聖人と等しく中庸の意志として道德的行爲に偉大なる勝縁の力を與ふるものは如來の心光の増上縁による。世に平凡の意志をして薄弱ならしむるもの、人の心意を搖動するの動機甚だ多し中に就て最も人心を動かす機會たるものに八あり之を八風といふ。

薄弱なる凡愚此八風のために意志をして鴻毛の如く左右せらる。八風とは何ぞや。毀譽謗稱苦樂利衰是なり。人の意志が天然の世界動機世俗情操の基礎の上に安立するものはいかにすとも斯八風のために動搖せられざることを免がれざるなり。人の天然意志は肉我を根として名と利との爲に執着し、肉我は名利の二を以て生命とす。實なくも名譽を望み、勞せずして利あらん事を貪り、實にその淺劣なる情操實に憐むべし。名と利との爲に目のなき卑賤家室に傷むべし。

彼等は斯二の爲に精神生命をまで忘れて、ついに心靈をして自ら獄火に葬り去らんとするをいとはず。

彼等は心靈により眞の如來の前に靈によるの名譽と靈の大利あるを知らず。唯眼前の仇し名利の爲に奴隸となることをいとはず。心光の増上縁を被らざるもの、比々然らざるなし。

人は譏譽褒貶のために己が意志を枉げても譏を避け譽を得んことを望む。

若し人如來の眞理の光明に標準とする燈臺なからんか、人の精神生活の過程は大洋を航する航路に等しく、航路誤り易し、八風はいつの間にか航をめぐらして方向を轉せしむ。人の意向なるも平凡の人の意向なるものは苦を避けて樂に就ん事を求め、道を枉げ徳を破りても之に就かん事をのぞむ。また利の爲には佗の利をも己に、害に對する向は他の利をも己に向はんことを欲し、斯八風は人の感情に激しき波浪を起し情操を動かして終に意向を俗情の動機に傾けんことを免れず而して意志が主我を根底とせばいがにすとも名譽と利欲の爲に動かさるゝことを遁るよしなし。こゝに到らばかに知識たるも世の豪傑たるも全く主我を中心とする人には八風のために動せざるはず

天然の我意と世界動機とは野卑なる情操にて之六道流轉の凡夫なり。之を超越して肉の我を超て如來の靈化の増上縁によりて一たび如來光明界裡の人となり。我意目的の迷妄なるを認め、如來の終局目的に隨順して益々向上して眞善美の極致なる靈界の彼岸に向つて行進するの意志と眞理の終局に勇進して自ら之を以て眞理なりと信認する時は世俗の譏譽褒貶も敢て意に介するにたらず。

如來は神聖にして眞理の光なり。斯光明を標準とせずして極樂に到らんとするも決して能ふべきにあらず。

開夜には燈臺ありて航路を過たざらしむると同じく吾人は如來の光明を増上縁として終局の天國に入る。自から思惟せよ。吾人は是如來の光明によりて天國の靈港に入るの航路たる生涯なり。世の八風のため意志を披け目的を誤たばいかでか眞理の極樂に入ることを得べきぞ。たとへ千萬人悉く非難するとも我意志は眞理の光明を標準として勇猛に往進して敢へて躊躇せず。

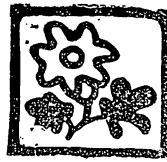
人は港の燈臺を標準とせずして、我意に隨はばやがて必ず航路を誤り開礁の憂なき

を得ず。

人生の航路如來の終局目的即ち天國に入べき標準たる如來光明の増上縁によらざれば、人々悉く我意自分勝手に、各自の目的を標準とせば闇黒の生活にして即ち三惡四趣の街にさまようなるべし。若し人八風のために唯我慾肉欲を恣にして、邪見惡逆の方向に進まば性格つひに奈落の底に沈むの悲あらん。私慾我慾の習慣は人をして餓鬼の業を成せしめ愚痴癡惡なると憍慢は人を修羅道に隨せしむ。

(終り)

二四



因

唐辛子の種子は唐辛子と爲り林檎の種子は林檎となる如く一定せる遺傳的生命を有せり。凡て人は祖先が傳ふる所を稟く。是即ち生理的方面の原因なり。父母の因縁より成たる結果の胎兒が即ち原因として人の遺傳的資性の良否は之を縁の力によりては如何ともすること能はざるものゝ如くなるも、天稟の資性は除くこと能はざるにもせよ、縁なる教育利導の力によりて絶對的不可能とは云ふ可からず。唐辛子の種子より唐辛子を生ずる如き、資性が善に惡に傾向あるは免れざるも、親は其子の肉と其氣質に至るまで美質缺點を傳て相續せしむ。

祖先よりの生命を遺傳するの血脉なるものは山上より溪谷に流れ入る水の如し、其流るゝ所の途中の土質によりて種々の成分を含む。即ち硫黃質また鐵氣等を含む如く其の過ぐる處の土質によりて水質を種々にす。祖先來流れ來る代々の住質如何は稟け出る人に善良又は惡質に變ぜる如き各個人の性質の特殊なるは其本源を過去の諸成

二五

分中に原因す。過去數千代に互れる歴史より血脉管を貰いて或は純潔又は汚濁となり此に養はるる肉體隨て強弱健不あり。其肉體の成分に於てさへ其の性格の上に關係を及ぼす。其人の性癖に於ても血肉との因縁を絶つ能はず。祖先より累代に善良なるもの純潔なるものとせば其より流出せる子孫は必ず善良なりとは斷定す可からざるも祖先の惡質は早晚其子孫の性質上に顯はるゝが如く遺傳的素質を稟けたるにもせよ人の一大天性は生理の遺傳已上に存在して人の精神の奥に潛伏せり。故に人は形氣と習性に於てこそ惡なるも其本性には美德に進まんと欲する性情は如何に墮落せる中にも在るなり。理に十界を具し性惡を具するは是人には靈性と肉の性とを具して常に本一體にして反對の方面に向つて欲望す。こゝに於て戰鬪する所以なり。

縁

人は生れ乍らの原因即ち遺傳として持ち來りしのみならず、縁により、教育等の縁によりても善惡の方面に成す。

人には先天の理性と共に又外界の刺戟によりて初めて成する所の感性あり。玉石の琢磨によりて其の有する光を放つ如く又人は縁即ち四圍の境遇に感染し易き性を有す。其薰染の力はたとひ其天性を根本的に改變せざるにも、習慣の性として第二の天性を成す。

人の認識に於ても本白紙の如く、感覺よりの經驗によらざれば記憶印象なく言語名字なし。

人の可變性は縁を待つるの性なり。其有機的組織にも其心理的能力にも四圍の境遇によりて其結果相同じならず。一切の言語文字より記憶印象風俗習慣の如きは悉く縁によりて成す。人は幼少より不斷に外界の刺戟に應じて日に其面目を改めつつあり。

風土因縁。外界の縁に影響を受けること最も深きは幼年時代なりとす。此時人は心身とも外界の刺戟に應ず氣候空氣食物等の爲に面目を變ず。田舎に育ちたる子供は都會に養はれたる少年と大に異り山野の人は強壯にして都會の人は虛弱を常とす。陽氣の處に栖む人と陰氣の中に住する人とは其顔色及び健康に異あり。新鮮なる空氣を吸

二七

入する人は顔色麗しく不潔なる空氣の裡に勞役する人は其血色憫むべし。此等の例を見るも四圍の物質の縁が人の身心に及ぼす關係大なりとす。因獨り成らず必ず縁を待つての理誰か否定せん。

周圍の事情は自然的なると又人間的知識的なるとによりて開展す。言語生活悉く其國民の形式を則り其國民の風俗習慣に銜淘汰せられ學校にて教育を受け教會にて教化せられ又其社會の薰習を蒙り終生其薰習の勢力を除去ること能はず。社會は彼に言語行爲を以て示す。其言語行爲は社會の縁によりてす。個人の資性發展の風俗習慣等は時代國民兩親朋友社會の爲に規定せらる。個人は社會の縁に依て造らる。

人の道義的因縁にも其交はる友により慈母の膝下に養はれたる子は神志伸びて氣象快活虐待を受けたる子は心屈して意地悪し。教育によりて柔弱とも活潑とも成り寵愛過ぎたる息子は氣儘にして兄弟多くして不自由の中に育ちたる子は貯蓄心に富み愛情深し、無教育に育ちたると道義的教訓に養はれたると大に同じからず。斯の如く人は其先天的遺傳的生命の原因より稟けたる資性も後天的教育四圍の事情宜しきを得ざれば悪化するの恐なきにあらず。人が六道四聖に分れ善惡迷悟に別れゆく因縁以て知るべきのみ。

若し幼少より父母博學にして又家庭教育に注意し幼少より學問を授けられ會話の中にも知識を開發すべき動機となるもの多くする如きは自然に兒の知能開け知識欲發達し後來大學者となるべく又大發明者と成るべし。知識的因縁は父母教師讀書思想言論主義に至るまで吸收し或は全く同化し或は之が自己の主義を發見するの縁となることあり。

縁を以て因を矯正す

境遇の事情に自然薰習すると無意識的なるとまた意識的に教育せらるるとあり。意識的なるは殊に勢力強し。たとへば青年子弟の品性に及ぼす因縁性來の惡癖を矯正して善道に向け性質の弱點を改革せしめ其柔弱なるを鍊りて勇壯にし亂暴なるを温良となす如き教育者にして堅忍持久の精神を以て實行せば必ず效驗空しからず其教育には

兒童の爲に仁愛以て兒童の情を暖め學識以て少年の知を發き獎勵以て其志を強くする如き至誠なる教育の力は資性習性をも改正して其面目を新にするに至る。

因縁所成の理

上に説來る如き、人は外界の縁によりて造らるとするも無機體機械の如くに外界に規定せらるるに非ず、自己の内面的活動の因縁ありて外界の助縁によりて生成し發達す。

自己の身體發育は自己に内的因縁ありて初期發展の初期にありては物質的影響を受けること多きを以て益々發達して後には因縁成立せる自己の意志によりて自由に周圍の事情の因縁を變化することを得。

人は幼にしては動物と同じく他動的なりしも人的意志發展してよりは自由意志を以て自己を形成す、終生他動的なる人は人格發達せざるが故に他の動物と同じ意識狀態にあるなり。

人は善惡共に其初期に於ては自然的因縁に規定せられて惡人とも善人とも成り得。其因としては祖先より犯罪に感じ易き素質を遺傳せられ性慾に道德缺乏の資性を有し加ふるに社會は彼に墮落すべき機を與へ惡友の誘惑に會ふ時は之を抵抗するの意志なく家庭に於ても境遇に於ても共に罪惡を矯正するの機會なく遂に斯る犯罪人となりて困獄呻吟するの果を見るの悲境に陥れり。

罪惡の遺傳生命を因とし家庭及び境遇の縁に養成せられて其結果は犯罪人として自ら縲紲の苦果を感じ罪人として世に擯斥せらるるの報を受ける犯罪者自身は他動的に犯罪となりて自ら苦果を受くるが如きは自業自得の理。然れども人は精進發達の初期には善惡共に他動的なるも次期に至りて自由意志自ら善惡を撰擇するの意志を以て自動的に何にも向ふことを得べし少年は全く他動的なれば國家も恕して刑法にも罪を論せず成人の後には全く他動的にして佗より規定せられたるのみの人ならば蓋は他の動物と同じく全く人間にあらざるなり。其等の精神は所謂傍生の性格に屬すべきのみ。

因果應報は必然にして家族が假に犯罪の資性を遺傳し社會は罪惡に誘惑と機會とを

以て與るが故に其報應に其父母等は犯罪人と同じく汚名を被むり又誘惑の機會を與へたる社會は其罰として犯罪者の爲に劫奪殘害の恐怖不安を招き數多の金圓を費して監獄費に給するは社會が受けたる報にあらざるや。

人性は善惡十界四具の性を有したる一大原因の性は佛性にあり。加ふるに物質的の體を稟くるに祖先來の種々に染りたる形氣的生命の中に清濁混雜たる性を遺傳せられたりとも、自由意志ありて自己が自己を規定すべき使命を以て人間に生れ來りしものなれば、其善惡にも自己に責任は免るること能はず。又社會には善惡何れにも誘ふべき機會充滿せり。教育あり教會あり然るに自ら聞くして光明に向つて道を求めざるより惡道に沈淪するは是誰の過ぞや。

生命の向上は人間の責任

佛教にては人は思と云意志を以て能く履むべき道を分別して惡を避け善に進むべき本務を有する生物なりとす。人には人間の性質が發達するに隨て自由意志ありて自動的に惡を却け善に向ふべきの靈性あり。善惡十界に區別して其因果の理を示すは三惡四報の業道を轉じて靈的正道に向はしむるにあり。人生は向上の心に向つて生れ來り。然れども自ら自性の惡を却け自ら正善に向上せんとの原因たる意向なき時は争でか其欲望を達せん。

自己の弱所を自覺せんには其發生の原因を究むべし。修養上極めて必要の事なり。性癖習性とても不治として自暴自棄するなかれ。

因縁の哲學

哲學の認識論が古來二派に分れて一は因原論即ち理性派認識の原理は自己の理性に先矢的に自己に有するものとす。人は自己の理性を以て他の精神の形式を推理することを得、如何にとなれば人の心理の形式は本理系に係りてあれば自己も他人も一致したれば自己を以て他人を推することを得。故に認識すべき理性は本來自己に有すとの立脚に立てるものを即ち因原論と云ふべし。

また感覺派にては人の精神は本白紙の如く一切認識は感覺したる物の經驗より生じたるに起因す。未だ生れてより一度も經驗せざる事に認識あることなし。故に一切の認識の起原は縁生なりとなす。認識論と同じく一切の生物の五官及び一切の感官機能の如きも原始の生物には官能もなく知覺なきを境遇の縁によりて漸々に生物進化の結果高等動物人類に發達して始めて感覺及び知覺認識をすることを得るに至り先天的因果論にあらざる縁依に進化の結果なれば縁起論に屬すべし。

演繹法は理性によりて萬法を推度し歸納法は經驗に基きて他を推す。因原論と縁起論なり。甲は自己の理性によりて推すことを得。乙は經驗によりて初めて認識すと、今佛教にては因縁所成論にて因縁成らず縁を待て初めて成生す。

緣覺に自己の理性を觀して其眞源に達する時は生死の源を悟り眞我の眞空に歸することを得。また一方には生死轉回の元因は無明にあり無明を因として行を發す行に由つて識を成す。斯の如く轉回は即ち因縁なり。因縁の源を悟る時は因縁は迷より生ず。

因縁より悟生し悟る時は眞空涅槃を得。菩薩に二種あり因原自性發悟論あり縁起神力感論あり。甲は自力宗と云即ち理性派なり。乙は他力宗にして感性派なり。甲は神の本體に基き自己の主體の最根に洞達する時は即ち神の本體と同一なり。主我の個人心の源を徹して本源に達すれば即ち如來なり。直に人心を指して其自性を發見すれば即ち佛陀なり。此派は飽くまで一切の内容を即ち感情の方面を排斥す。故に己の理性と一大理性觀念と本來一體なれば自性即ち一大理性にして是如來なりと觀す。自性は佛なれば此自性の外に頼むべき神もなく仰ぐべき恩寵もなし。自性本來の光明普く法界を照して遺す處なし。此外に何を頼み何を仰がむと。寔に此宗の自己の心源神の本體と一體なりと悟る處はまことに是なり。然れども如來には無盡の性徳と無限の妙用あり。此如來無盡の力能に對して之に信賴するの信念なきは宗教としては未だし。殊に宗教として實に畏敬し欽慕し渴仰し信賴すべきものは人の感情にして如來の力用なり。力能の方面より見ればいかに見性大悟すと云とも此身心の力用は宇宙に無限なる偉大なる神の力に比すれば實に一微塵にも及ばざる一虫に過ぎず。成る程理性の如き觀念の如き、宇宙は自己の觀念中なりとは自ら觀見する處、然れ共實用に至つて

は自己の身體四肢五臟六腑尙自ら認識するの能力なし。自己の身體も一時間の生命も自ら能くせざる處、明日我身に如何なる事出來する哉を豫知するの明なし。實驗實感の段に至つては仰いで無限の靈力を信仰するの外なし。

自性家は自性の外に神として信するに足る者なしとす。然れども實際の宗教なるものは無限の靈力に對して畏敬渴仰して初めて成立すべし。哲學者ベーコンもまた曰く哲學家は少しく講究すれば人をして無神論者たらしむれども深く之を研究すれば人をして有神論者たらしむと。實に現宇宙に對しても現實は決して單純自明のものにあらず。宇宙は驚駭に堪えざるものにして其深奥なる本質は潛心精慮すとも尙之に到達すること能はざると觀し人間の斯かる不可思議の實體に對するや畏敬尊崇を禁する能はざらん。

科學は純粹に之を研究する者をして傲慢ならしめず反つて自己の塵芥に等しきを悟り以て謙遜の情を惹起す。ニウトンもカントも亦然り。

ゲーテ曰く思惟する處の人間の最大幸福は其研究し得る所のものを研究し終りて靜に其研究し得ざるものを畏敬するにありと。

無限に對する畏敬の感情は實に宗教の基礎なり。畏敬の感情は謙遜と依頼との二感情を包含す。謙遜とは無限に比して自己の物のかずならぬを感じるの謂にして、依頼とは無限は常に外面的に強大のみならず吾人を生産し長育する處の大能力なりと感するの謂なりと、這般の感情は宗教の中心點なり。

又曰く余以爲らく正人君子は主として宗教的感情を有すと、人間の精神な純粹美麗に發展するに従ひて益々宗教の基礎たる畏敬の感情を有すと。吾人が眞實に世に處するに従ひて其實現する所と其理想とは天淵の差あるが故に益々謙遜となり其生活々動に強大自由なるに従ひて益善の終極の勝利を信するに至らん。

自力理性に偏する宗教者また老莊派陽明派の如きは感情的宗教心が發展せず唯精神を形式の一片に觀じて畏敬信賴感謝の如き靈的活動の方面を缺くるは實に完全たる宗教心にあらざるなり。

支那宋元の代自性偏執の禪者は宗教的を唯理性の一片に偏執す。故に偉大なる靈力

に對する畏敬信賴感謝の感情的信仰を誹謗するに至る、彼等は半面識の科學的青年輩と同じく半面的修行者に多しとす。

またパウルセンが世俗の學者が知力若くは意志の一方が強度に發達して之が爲めに其高尚なる感情の發達を防ぐるものあり。或數學者が詩歌の講義を聴くを悦ばずしてこは何をか證明せんと。是等は證明のみを以て事とするを以て其他の事柄に興味を有すること能はず。何人も一方に全力を注ぐ時は殆んど這般の反動を受けざるなし。將た實踐の問題にのみ熱中すれば之と關係なきものは毫も興味を有せざるなり、此等の人は正人君子たりと雖も、正規的發展を遂たる者と云ふこと能はず。内の生活の重要な人の美なる詩的なる所自由なる所の發展を障礙せるものと言ふべし。

宗教意識に於ても此と同じく自性を一方にのみ熱中し全自性發展する時は宇宙萬有我にありと觀じられ天地は自己心中の物なりと觀じ因を以て縁を奪ふと蓋しそは外界事物の爲に其自ら動搖せられず五塵の奴隸たるを免れんが爲なり。

然れども力能の點に至つては神を客體に立てることを拒絶するが故に神の靈能に對して感ずるの信仰を缺くは宗教としては不完全なり。

神を唯實體の方面より觀ずる時は宇宙全體唯一の一大心靈態にして純粹自明なるの觀あり。理性者は唯斯方面のみを神と見做して一大心靈體裡に無盡の相好無限の力能より發現する處の相好圓滿の如來光明遍照の神尊至美莊嚴の美天國四德莊嚴の樂園は神界に在ることを知らず。菩薩の靈體にも二種ありて理性の方面に偏せる宗教觀には其意識の客體とする本尊觀も、理の方にのみ偏して事相莊嚴即ち相好圓滿の佛身を立てず。

(終り)